

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

| | | | |
|---|--------------------|------------------------|------|
| 博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.) | 博士 (文学) Ph.D. | 氏名 (Candidate Name) | 水野和穂 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 論文題目 (Title of Dissertation) A Study on the Language of Samuel Johnson: With Special Reference to the Language of his Correspondence | | | |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee) | | | |
| 主査 (Name of the Committee Chair) | 教授 | 今林 修 | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 大地 真介 | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 大野 英志 | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 中村 不二夫 (関西外国語大学) | |
| 審査委員 (Name of the Committee Member) | 教授 | 福元 広二 (法政大学) | |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation) | | | |
| <p>本論文は、サミュエル・ジョンソン(1709-1784)の私的書簡の言語について、コーパス言語学の手法を援用し、綴り字、語彙、文法の側面より包括的に文献学的記述を試みたものである。18世紀のイギリスを代表する文人の言語、そして、日常言語に近いと言われる書簡の言語を詳細に調査することにより、当時の言語状況の実態を究明した論考である。</p> <p>全体の構成は、序論、本論7章(結論を含む)、付録から成る。</p> <p>序章では、本研究が「標準英語成立への個人の言語使用が及ぼす影響を調査するプロジェクト」の一部であると同時にその起点をなすことが説明される。</p> <p>第1章では、18世紀イギリスの時代背景を概観し、諸分野において「安定」を好む時代気運が高まった状況を指摘する。また、1980年代まで軽視されていた後期近代英語研究が、1990年代以降劇的に進展していることを確認し、これにはコンピュータ技術の革新に伴うコーパス言語学の発展が大きく寄与していることを指摘し、その産物である英語史コーパスを紹介する。</p> <p>第2章では、コーパス言語学の手法を援用し、ジョンソンの散文の特徴について量的考察を行う。まず、バイバーとフィネガンの「多次元分析」によるThe Century of Prose Corpusの解析により、18世紀の英語散文は一様ではなく、前半と後半では文体に違いがあること、さらに、ジョンソンが活躍した1750年以降、口語的文体から文語的文体への明らかな回帰があることを指摘する。</p> <p>第3章では、ジョンソンの生涯、彼の書簡集についての書誌学的情報、そして、ブルース・レッドフォード編集の<i>The Letters of Samuel Johnson</i> (1992-1994)に収められている総数約1,500通(1731-1784)の全書簡を電子化した第1次資料を用いて、書簡冒頭部の定形表現から彼の社会的ネットワークを検討する。書簡冒頭部の定型表現は、ベイカー (1980) が示唆する以上に変化に富んでおり、ジョンソンが送った書簡の数が多いため文通者に対する冒頭部の定型表現は、ヴァリエーションに富むだけでなく、非形式的な表現も散見されたことを指摘する。</p> <p>第4章では、<i>A Dictionary of the English Language</i> (1755)及び<i>Rambler</i> (1750-1752)を参考コーパスとして、ジョンソンの書簡における綴り字について考察する。その結果、彼はオセルトン (1984)の言う「公的基準」に従っていたわけではなく、綴り字の選択には、(1)彼の「規則と実践」が一致しているもの、(2)彼の「実践」が「規則」に反しているもの、(3)彼の綴り字選択が不安定であるもの、という3つの方向性を指摘する。</p> | | | |

第5章では、ジョンソンの書簡の語彙を、*Rambler*を参考コーパスとして考察する。ティーゲン(2014)の枠組みを用い、言語的関与性について検証し、自我的関与、対人的関与、強調的関与の全ての評価基準において、*Rambler*よりも書簡の方が極めて関与性が高いことを指摘する。また、書簡の言語にも、いわゆる「名詞化」と「並列表現」に代表される「ジョンソン流文体」の痕跡が見られると結論づける。

第6章では、ジョンソンの書簡における文法状況を、*Rambler*を参考コーパスとして、(1)文法カテゴリーに関わる大きな変化、(2)出現頻度レベルでの変化、(3)当時の口語語法との比較、より考察する。

第7章(結論)では、以上の研究から、「ジョンソンは規範文法支持者だったか」という自ら立てた問に「否」と答えを示し、ジョンソンの英語に対する貢献は「規範化」ではなく「標準化」の助長であったと結論づける。

18世紀の半ばで、なぜ作家が用いる文体が大きく変わったのか、ジョンソンが目指した文体とはどのような文体だったのか、同時代またそれ以降の作家に、ましてや標準英語の成立に、彼がどのような影響を与えたのかなど、今後の研究課題として残っているが、コーパス言語学の手法と文献学の知見から、今日まで注目されていなかったジョンソンの書簡の言語を、綴り字、語彙、文法の観点から究明したことは、学界に大いに寄与する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(文学)の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)